

## 「授業備品」N073 H30.11.12 「どこから手を付けたら分からぬ時」

学力の数値を上げられない理由を「生徒指導が大変だ」とする教師や学校。教師の「力」で抑えられる指導の学級は、それなりに平静となるが、そうではない教師の学級は荒れる。実は、抑えられない教師に「力」がないのではない。生徒指導だけに目がいき、学校全体で授業改善に向かっていないことに問題はないだろうか。

中高等学校は、生徒指導と併せて部活動指導もあり、教科指導の改善が図れないとの声も聞く。校内全体でアクティブ・ラーニングの指導が難しいとも聞く。では、アクティブ・ラーニングはいつになつたら出来るのだろう。教師の姿勢が変わらない限り、新学習指導要領の浸透は難しい。

教師が、「子供に受動的な授業」をしている限り、変えようとしている限り、学校の諸課題は解決できない。1日6時間も教師の一方的なおしゃべりを教師から聞かせらる子供の気持ちを考えただろうか。苦痛なのだ。山場のない授業。教師の指示や説明が多い授業。子供たちが何かを訴えるためにルールとは違う行動をするのは当然ではないか。これに気がついているだろうか。この現状から脱却できる方法を考えて見た。

### 1 日々の授業の中に、全教科グループ学習を入れる

中高等学校は、受験科目や暗記をする教科、実技を伴う教科と様々だ。指導方法は異なると考えがちだが、実はそうではない。子供同士が協働で学ぶことは同じなのだ。グループワークがその代表例だ。友達とのグループワークを通して学習課題を解決していく。グループの中で教え合うことを大事にしていく。周りの仲間から誉め言葉をもらったり、作業を協力する、ぐーぱー確認で困っている仲間を教える。こうしたことがグループ学習の中でできれば、授業に達成感をもつ子供が多くなると思う。

### 2 全員が活躍する場面を10か所以上取り入れる

授業備品でここ何回か、子供が参加だけではなく、活躍する授業をと書いてきた。この背景には、教師対子供の従来型の授業があるからだ。教師主導の授業だ。教師と子供の一問一答で進める授業。授業内容についていく子供はよいが、大半はそのうちわけが分からなくなる。

子供が一人でぶつぶつ、ペアで話し合ってから自力解決に入る、まとめや振り返りは全員が話す等のことを大事にすれば、多くの子どもが授業満足になる。特に、ホワイトボードには全員が記入することよい。

### 3 問題解決学習過程のUD化を図る

アクティブ・ラーニングは、問題解決型学習がその代表といつてもよい。課題提示（問題の提示→問い合わせをもつ→問い合わせの共有（見通し）、自力解決、集団解決（ペア→グループ→全体学習→考察）、まとめ→振り返りの学習過程をどの教科も同じようにする。問題解決学習のUD化を図ることにより、子供は教科横断的な形式で学ぶことができる。

### 4 板書用グッズを貼る

授業の流れは、教師だけが分かっていればよいものではない。子供たちにも最後がどのような形になるかが分かると学びの手順を理解することができる。教師目線ではなく、子供目線に立てば当然のことだ。授業が始まる前に、課題、問題、見通し、自己確認、友達確認等のグッズを貼る。子供たちにとって、授業の流れが分かりやすくなる。教師にとっても授業の進行の仕方が分かる等のメリットがある。

### 5 授業運営を子供に任せる

手抜きの授業は、教師がよく話す。教師が言葉で説明すれば、手取り早く授業が進むからだ。だが、教師には都合がよくても、子供にとって教師の「脳」の移入であって、自分事には落とし込めない。そこで、授業運営を子供に任せる方法をとるとよい。学習リーダーが進行に当たれば、子供たちは協働で学ぶ意識も出てくる。子供は仲間の指示や支えの中で学習を意欲的に進めることができる。やがては教師を頼らず、子供達同士で学べるようになる。アクティブ・ラーニングを進めるには、学習リーダーは必須な条項の一つだ。

### 6 教師は、しゃべらない

しゃべりたがる教師が子供を成長させないケースを幾度も見た。子供たちが受け身になるからだ。教師は話さず、子供が教わる姿勢が重要だ。教える教師ではなく、気付かせる教師でありたい。